

ナシ「あきづき」における1年枝の冬季せん定時の誘引法

「あきづき」では、予備枝(マチ枝)から伸長した発育枝(1年枝)を、せん定終了後に棚面に対し45～60度の角度で誘引することにより、短果枝が多く着生し、生産が安定する。

農業研究センター 果樹研究所 落葉果樹研究室(担当者:谷口 政弘)

研究のねらい

「あきづき」は、2年枝以降の側枝では短果枝の着生が非常に少ないため、「幸水」と同様に長果枝を多く利用したいが、「幸水」より腋花芽が着生しにくい。そこで、予備枝(マチ枝)から伸長した発育枝(1年枝)に短果枝を多く着生させるため、棚面(水平)に対する1年枝の誘引角度を検討する。

研究の成果

1. 予備枝(マチ枝)を取った区の中では、弱誘引(60度)区と中誘引(45度)区が強誘引(30度)区より花芽(短果枝)の着生率が高い。直接枝では、誘引角度が大きくなるほど花芽の着生率は高くなる傾向がみられる。また、同じ角度で誘引した予備枝区と直接枝区を比べると、予備枝区の方が花芽(短果枝)の着生率が高い(図1)。
2. 1果重は直接枝の中誘引区と強誘引区が他の4区よりやや重い傾向がみられるが、果肉硬度、糖度、果形、果汁pHについては処理間の差がほとんどない(表1)。
3. 予備枝からの1年枝に着果した果実と、直接枝に着果した果実については、ほとんど品質差がないことから、直接枝を利用するより、予備枝(マチ枝)から伸長した発育枝(1年枝)を多く利用した方が、花芽(短果枝)が多く着生し、生産がより安定する。また、その誘引角度は棚面に対して45～60度程度が適当である。

普及上の留意点

1. 強く誘引しすぎると、誘引した枝の上面にある芽が伸び出して櫛の歯状になり、短果枝が着生しにくくなるので注意する。
2. 傾斜地での誘引角度は、棚面ではなく、水平に対して45～60度程度とする。
3. 直接枝は大きくなりやすいので、なるべく予備枝(マチ枝)からの1年枝を用いる。

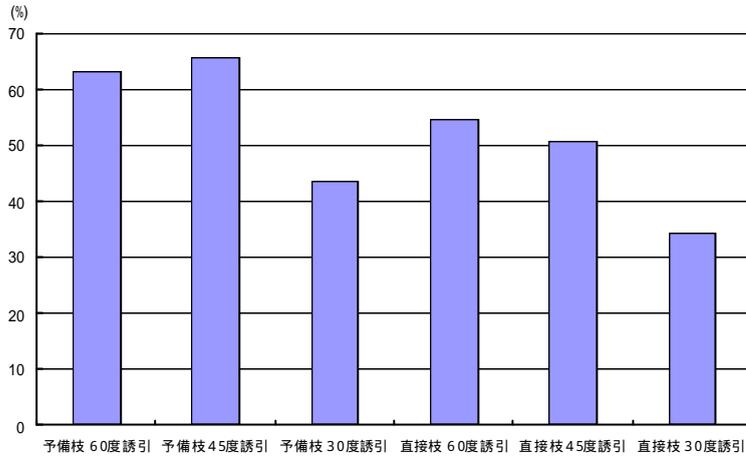


図1 予備枝・直接枝の誘引角度別短果枝着生率

表1 予備枝・直接枝の誘引角度別果実品質

区	1果重	硬度	糖度	果形	PH
予備枝 60度誘引	435.6	4.9	12.6	4.8	5.0
予備枝 45度誘引	419.6	4.8	13.2	4.8	5.0
予備枝 30度誘引	420.4	4.8	12.7	4.9	5.0
直接枝 60度誘引	425.6	4.9	13.2	4.8	5.0
直接枝 45度誘引	497.5	5.1	13.1	4.7	5.1
直接枝 30度誘引	475.6	4.8	13.7	4.7	5.0

注) 硬度はマグネターを使用

果形(良:5~悪い:1の5段階評価)



垂主枝等から発生した新梢を20cm程度残し切り返す(マチ枝)



翌年マチ枝から伸長した発育枝を充実した部分で切り返し45~60度程度で誘引する(せん定時)



翌々年この発育枝の先端から新梢が伸び短果枝が着生する



短果枝が着生した2年枝を棚に誘引し着果させる